

シンポジウム①

高次脳機能障害者の支援を再考する 地域在住の高次脳機能障害者の支援を通して 考えていること

兵庫医療大学リハビリテーション学部作業療法学科
清水 大輔



脳損傷後の後遺症には、高次脳機能障害のみでなく、うつや不安、イライラなどの心理的な精神症状も生じる (Williams et al., 2003)。認知、行動、感情の問題は、脳損傷後に高頻度で認められ、長期間続く可能性があると報告されている (Bergersen et al., 2010)。これらの問題は、日常生活や社会生活の多くの側面を妨げる要因となり、当事者とその家族の生活にかなりの影響を与える (Wood & Rutherford, 2016)。

欧米では包括的（全人的）リハビリテーションの考えをもとに、地域で生活する高次脳機能障害者に包括的な介入が展開されている (Wilson, 2009)。本邦のおいても、「高次脳機能障害支援普及事業」により、高次脳機能障害者とその家族に対しての地域支援の調査報告や実践報告が少しずつ増えている（例えば、後藤、2019、宮原、2019）。

高次脳機能障害者の支援は、機能障害の改善を図ることだけにとどまらず、代償手段を獲得するための練習なども含まれる。さらには、その人が生活する地域で、その人が生活しやすくなるような社会資源を利用できるよう調整する必要があり、多面的な視点が必要となる。

演者は、2012年から地域活動支援センターで高次脳機能障害者とその家族と関わっている。そこでは、「その人がしたいと思っていることに挑戦するきっかけをつくること」や「家族が当事者と一緒に生活する中で、困っていることの解決策を一緒に模索する」ということを実践している。演者は地域支援を通じて、高次脳機能障害者が地域で生活していく上で、「安心できる場所・人が在ること」、「挑戦する機会があること」、「当事者だけでなく、家族も支援すること」の必要性を痛感している。シンポジウムでは、演者の実践結果を一部紹介する。

長期の入院が難しい医療制度下では、高次脳機能障害者がリハビリテーションサービスを受ける場所や頻度は限られる。この限られた医療・福祉サービスの中で、対象者と家族が少しでも前向きに生活していくようになるためには、まだまだ課題は山積している。本シンポジウムでは、高次脳機能障害者の支援について、多角的に再考できる機会にしたいと考える。



【略歴】

学歴：学校法人福田学園 大阪リハビリテーション専門学校 作業療法学科卒業（2004年）

高知大学大学院 医学系研究科 修士課程 修了（2009年修了）

神戸大学大学院 保健学研究科 博士課程 修了（2016年修了）

職歴：医療法人新松田会 愛宕病院リハビリテーション科（2004-2009年）

医療法人朗源会 おおくまりハビリテーション病院（2009-2013年）

学校法人福田学園 大阪保健医療大学保健医療学部

リハビリテーション学科（2013-2017年）

学校法人兵庫医科大学 兵庫医療大学リハビリテーション学部

作業療法学科 講師（2017-現在）

